「記号化分節法」による英語構文解析

河　宮　信　郎

■　序

英文の読み書きにはセンテンスの構文解析が必須である。もちろん、簡単な文では単語の意味と並びぐあいで構文が理解でき、わざわざ文法知識を持ち出さなくてもよい。しかし、書く場合には、簡単な文でも構文の知識が問われる。

通常の英文記事や文書、論文などの文は、分詞構文や関係詞、条件法などを含み、構文解析なしで意味を正確に把握することはむずかしい。たとえば、今日インターネット検索で多種多様な情報がえられるが、それらを正確・迅速に読みこなし、信憑性も必要に応じて吟味することを考えると、構文解析の力が不可欠である。

じつは、構文解析のために必要な知識は高校の英文法のテキストや受験参考書にかなりよく記載されている。したがって、授業や受験勉強で英文法を学んだ人は、英語構文解析の基礎知識を一通りもっていることになる。ところが、実際に英文の記事や文書を読むときに、必要な構文解析をきちんと実行できる人は少ない。たとえば、経済学部の英書購読を受け持ってきた経験からいうと、学生諸君の構文解析能力は大変頼りない（しかし、ていねいに教えるとそれなりに向上する)。

なぜ折角学んだ文法知識を活用できないのか。これにはつぎのような事情がある。まず第１に、「5文型」の文型表に不備があり、これでは分析できない構文がある。このためもあって、複雑な文に文型分析を適用することがむずかしい。また、さまざまな文法知識が構文解析と直結しているのに、その結びつきを学んでいない。たとえば関係詞・接続詞あるいは分詞構文や不定詞構文に関わる知識は、構文規則の重要な構成部分であり、そういう観点から見直すことが大切である。さらに、英文と和文の間に構文的な対応関係が成り立っている（ただし語順は変わる）ことに対する認識が不十分である。訳文が和文としておかしくなっているときは、英語の構文を理解できていないのである。

英語に習熟した人は、これらの問題点を克服して、きちんとした構文解析の力を身につけている。また、すぐれた英語教師はこの力を伸ばすように学生を指導しているであろう。他方、多くの英語学習者は、辞書を引いて未知の単語の意味を調べたらすぐに（構文解析のステップを飛ばして)、訳した単語を「勘」でつないで訳文に仕立て上げようとする。日本語として通じない訳文をつくっても「翻訳だから仕方がない」と考える（日本語力も足りないことが多い)。

当然ながら、職業上ないし研究上英語文書を読み書きする人々は、相応の構文解析能力を身につけている。それでも不適格な英文を書いたり、英語構文から外れた訳文をつくったりすることが少なくない。筆者がこの問題に気づいたのは、日本の英字紙誌に構文上のミスが多いことからであった。

さらに、学術誌の査読を頼まれたときに英文アブストラクトの作成などにかなり問題があることを知った。投稿者だけでなく査読者にも構文上の知識不足がある場合、不適格な文がそのまま査読を通ってしまう。たとえば、仮定法の語法に誤りがあり、それが無修正で査読をパスすることもある。単なる仮定と「事実に反する仮定」の書きわけが正確にできなければ、科学論文として失格であろう。このように、扱う内容が高度になれば、それに応じて要求される構文解析能力のハードルも高くなる。

こう考えると、高校生・受験生から社会人、英字紙誌のライター、諸分野の研究者など広範な英語使用者がそれぞれに構文解析能力の向上という課題を抱えていると思われる。

それでは、構文解析の能力を高めるにはどうしたらよいか。これは、英語教育においてもさまざまな研究活動に関わる英語使用においても長年の懸案であったと思われる（もっとも、この課題は重要性のわりに等閑視されてきたきらいもあるが)。

この課題に応えるのには、《正しい英語文型を学んでそれを縦横に活用する》ことが最善であると筆者は考える。ここで、「正しい文型」といったのは、伝統的な 5 文型ではなく最新の改良版（後述)を指しており、「縦横に」というのは文型分析を文や節、準動詞構文すべてに適用するという意味である（これを迅速・容易に行う方法をあとで述べる)。

伝統文法の 5 文型論は《副詞句を文型要素に入れない》という重大な欠陥をもっていた。したがって、この文型論は、「副詞句が文型要素となる構文」を一律に取りこぼし、構文解析のはたらきを妨げていた。この点を改めて新しい文型論を採ることにより、構文解析の機能が飛躍的に改善される。また、構文の取りこぼしがなくなり、普遍的に適用可能なものとなる。

新しい文型論の活用により、文型の判別を軸とする機能的な構文解析が可能になった。しかし、このことがひろく知られているとはいえない。文科省の学習指導要領は、旧い 5 文型論を正統とし、中高の英語教育を拘束している。大学の教科内容は文科省の指図を受けないはずであるが、学生向けの文法テキストはいまなお 5 文型論が多数派である。ただし、いくつかの英語辞書（大修館、研究社など）は文型論の新成果をフォローし、副詞句を文型要素に取り入れた文型表を記載している。また、新しい文型論に拠る文法テキスト（大学用）も増えつつある。しかし、折角の知見がなぜか教科書や参考書、英語に関する一般書（Know-How 本など）に広まらない。

本稿では、文型論の新しい成果を活用して、構文解析法をわかりやすい形に再編・体系化し、いわば汎用の構文解析マニュアルをつくることを試みる。

このために、以下のような新しい手法を考案した（詳細は次節以降参照)。

① 汎用文型 SVXY の設定：構文に関わる文法知識を理解と記憶の容易なかたちに整理・再編する。英語の単文（基本文型）はすべて主部と述部からなり、述部は動詞のあとに 2 個以内の文型要素がつく。この一般的な文型を SVXY と仮に表し、これを VXY の相互関係に即して区分し、8 文型のリストにまとめる。

② 記号化分節法：文を文型要素に区切る（分節する）さいに、要素ごとに異なる記号を当て、文型要素の属性判別（S、V、O、C など）を効率化する。分節記号の機能化により、分節そのものが文型認知の第一ステップになる。

③ 和・英構文の対照：和文⇔英文の変換で、語順は変わっても「文型の同型性」は保たれる。この記号化分節による構文解析は、「語順式統語法」に立つ英語構文と「格助詞による統語法」に立つ日本語構文を適確に対応づける。なぜなら、分節記号は文法機能を示す後置記号であり、日本語の格助詞に似た統語標識だからである。英語構文と日本語構文の対応性を認識することは、英文解釈にも英作文にも役に立つ。

以上の手順により、英語の単文（基本文型）はほぼ機械的に構文解析できるようになる。より複雑な文に対しては、やはり「意識的」な構文解析が必要となる。基本文型に余分の付加語が加わる派生文型や、さらに不定詞構文、分詞構文を含む場合、また関係詞・接続詞を含む重文、複文などの場合である。つまり、文の構成が 2 階建て、3 階建てになっている場合、各階に対して文型判定を行い、かつそれらの相互関係（いわば階層をつなぐ「階段」のありか）を考える必要がある。

むしろ、構文解析の効用はこういうにときこそ発揮される。センテンスの中に主部・述部のセットを含むサブセンテンスがいくつかあり、その組み合わせから全体の文が構成される。そのとき、個々のサブセンテンスはみな基本文型の構文解析に従うから、結局は単文（基本文型）の構文解析の積み重ねで複雑な文の構造も明らかにできる。

要するに、単文の文型認知・構文解析を出発点として、複雑な文に対してもそれをシステマチックに適用することが必要である。これにより、英文の解釈も作成も「あいまいな文法知識＋勘」ではなく、明晰な構文解析法に拠ることができるようになる。

ただし、英文を十分な速く読むためには、読み進むのと同時・並行で構文解析をする必要がある。「文法書と首引きで構文解析に努める」というのでは読書にならない。むしろ、一度読んで構文解析の「考え方」を会得したら、あとは実際の文章だけをみて自力で構文解析を実践することが望ましい。

たとえば、漢文に習熟した人は、返り点のついていない漢文（白文という）を返り点がついているかのように読み下すことができる。同じ原理で、本稿で述べる「記号化分節」式の構文解析法に慣れれば、普通の英語の文をみたときに、あたかも句の切れ目に分節記号が書いてあるかのように（文型注釈つきの構文として）読み進むことができるであろう。そうなれば、語順を変えていちいち日本語構文にせず（＝和訳せず）、英語構文のままで原文を理解することができるようになる。この能力が、英語を話したり書いたりするための基礎力になる。

■ 英語構文の汎用文型―SVXY

【3 項文型・SVX】

英文では、自動詞の多くが「She is a student.」のような SVC 文型［主語・動詞・補語］をとり、他動詞の大半が「I ate an apple.」のような SVO 文型［主語・動詞・目的］をとる。しかし、これ

だけでは英文の読み書きができない。

このSVCとSVOは〈全文型に備わるS・V＋第3項〉という形をしている。そこで、これらをまとめてSVXと表し、「3項文型」と呼ぶことにしよう。〈項が空白になる〉ことを認めると、SVXは命令文（X、VX）やSV（完全自動詞文型）を含むといえる。要するに、文型要素がないことは「空白である」ことと同義だから、3項文型・SVXは、2項文型SV、VXおよび1項文型Vを含む。

【4項文型・SVXY】

よく知られた文型SVOOやSVOCは、第4の文型要素をもつ。文型要素が4項ある場合、これを4項文型と呼び、SVXYで表すことにする。周知のSVOOはXY＝OO、SVOCはXY＝OCの場合にほかならない。前に述べた3項文型・SVXは、4項文型SVXYの第4項が空白の場合とみてよいから、これに繰り入れる。つまり、「4項文型・SVXYは3項文型・SVXを含む（Y＝Null)」と考える。†

結局、4項SVXYを想定して、XとYの有無や素性（属性）を調べれば、あらゆる英語構文（単文）の構造を理解できる。このアプローチではまず、文を文型要素に区切り、その数を数える。ついで、VとXYの関係から、X・Yの素性をたしかめる。ある意味ではだれもが経験的に実行していることであろうが、それを意識的・系統的な操作として行うのである。

そのさい、「文型を記憶」して「各文がどの文型に当てはまるか」を考えるのではなく、どの文も一律に「SVXYという文型をもつ」と想定し、仮の文型要素XYの属性を文脈に即して判別するのである。

これは、算数（鶴亀算など）から代数に転換するのと同じ要領である。代数では、未知数をX、Yなど代わりの数〈代数〉で表し、これに加減乗除の演算を施す。つまり、X、Yは品詞未定の文要素〈代品詞句〉である。

しかも汎用文型SVXYの「解」は、代数とちがってつぎの8通りしかない。

まず、自動詞ではSVCAに限定され、他動詞ではSVOY（Y＝空、A、O、V）になる。文型要素が空白になる場合も明示して、文型を列挙すると以下のようになる。

【英語構文（単文）8文型】

	SVXY	呼称1	呼称2	例文
①	SV－－	Ⅰ	Ⅰa	Money talks. (Money matters.)
②	SVa－	α(新)	Ⅰb	She is out. cf. She was on the edge. → ③
③	SVC－	Ⅱ	Ⅱa	She became a pianist.
④	SVCA	β(新)	Ⅱb	He is afraid of dogs.
⑤	SVO－	Ⅲ	Ⅲa	Bees gather honey.
⑥	SVOA	γ(新)	Ⅲb	She compared American English with British.
⑦	SVOO	Ⅳ	Ⅳ	He gave her a book. cf. He gave it to her. → ④
⑧	SVOC	Ⅴ	Ⅴ	They elected him President. N.B. 無冠詞
				We heard her groan in the bed. (groan：呻く)

文型名のローマ数字Ⅰ～Ⅴは旧5文型での呼称である。新文型α、β、γにⅠb、Ⅱbなど添え字をつけて旧5文型と関連づける命名法が「呼称2」である。

結論的には、SVCAとSVOY（Y＝O・A・C）だけ覚えればよい。このSVXYアプローチは、簡明な方法ながら、伝統文法の5文型論よりもはるかに正確な構文解析を可能にする。なぜかというと、5文型論にはつぎに述べる重大な欠陥があったからである。

なお、文型⑧の構文は論理的に複雑で、補足的な説明を要する。つまり、この構文の特徴は、O（e.g. him）とC（e.g. President）が意味上主部・述部の関係を表し、1種の「埋め込み文」をなすところにある。例文のOCは、選挙の結果「He became President.」を含意する。

動詞Vの特性に呼応して補語Cに、(a)名詞、(b)形容詞、(c)toなし不定詞、(d)to- 不定詞、(e)現在分詞、(f)過去分詞が入る。この6通りについて、代表的な動詞を知っておくことが望ましい。

(a) 名詞：　We appointed him chairperson.

(b) 形容詞：　I found the novel very interesting. [知覚、思考、意識等]

(c) toなし不定詞：　I felt the house shake. [知覚動詞、使役動詞]

(d) to- 不定詞：　We believed him to have been innocent.

(e) 現在分詞：　I heard a dog barking in the dark.

(f) 過去分詞：　Did you hear your name called?

多様な場合があり一見複雑にみえるが、原理的には簡単である。なぜなら、上記の例はすべて、《主文の目的語であるOが「意味上の主部」として、Cという「意味上の述部」を支配する》という「同一の構造」に還元できるからである。すなわち、〈O＋C〉が意味上〈S＋VXY〉の埋め込み文（補文）を表すことを理解していればよい。つまり、

たとえば、2番目の文例は補語が（C）のtoなし不定詞になる場合に相当しherがgroanの意味上の主語であり〈she groaned〉が埋め込まれたことがわかる。

自動詞文型SVCの補文化：C → be*＋名詞(a)、形容詞(b)、現在分詞(e)、過去分詞(f)

（ここで「be*」は繋辞copula一般を表し、実際上は省略される）

他動詞文型SVOXの補文化：C → toなし不定詞句(c) or to- 不定詞句(d)

要するにこの文型は、SV〈s＋vxy〉という二重構造をとる。〈s＋vxy〉は埋め込み文のSVXYを表す。これが原理的には8文型のどれでもよい。だが、さすがにsvocの二重文型はなさそうである。

【4項文型拡張の意義・伝統的文型論の欠陥是正】

伝統的な5文型論が設けた4項文型は、SVOOとSVOCのみである。すなわちSVXYで、X＝O：Y＝O、C。そして、これ以外の4項構文は単に第4項を無視し、3項文型とみなす。この結果、一連の重要な4項構文が文型論の考察から排除される。

しかし、現実の英文には、「He / is / afraid / of dogs.」や「He / compared / A / with B.」のように第4項に副詞句（A：Adverbial）を有する構文が多数存在する。これらの構文を取り込むためには、SVXAという文型を設ける必要がある。これによって、4項構文の取りこぼしがなくなり、構文解析の信頼度・守備範囲が大幅に向上する（後述）。

伝統文法は副詞句を文型要素と認めない（A 無視の規約）。このために、SVXA の文型をすべて SVX と見なす。この結果、伝統文法は、SVXA（例：She gave it to him）の第 4 項 A の機能や意味を扱えない。4 項からなる構文を 3 項文型で分析することはできないからである（もちろん、構造文法や生成文法はこの弊を免れている）。

副詞句 A が文型要素になることを認めると、XY の組み合わせは増える。しかし、A が文末（第 4 項）に入る場合のみを考えればよいので、XY の組み合わせは次表の通り、8 通りに収まる。

（ただし、文型要素にならない副詞句もある。程度や時を示す副詞句などが、付帯的な状況を説明する場合には文型要素とはみなさない。伝統的 5 文型論は、すべての副詞句を「単に付帯的状況を示す」ものと見なして、一律に文型要素から外したのである。）

新文型表は、旧 5 文型に文型②、④、⑥が新たに加わっている。この 3 型では、すべて副詞句（A）が文型要素として文末に入っている。例文から、文末の A が必須の文型要素であることは明らかであろう。

これを用いて、afraid / fond、hard / easy のような A（副詞句）随伴型の形容詞（述語用法）や、compare、put のような A 随伴型の他動詞を支障なく扱うことができる。

※注：表 2 行目の「on the edge」は、文字通り「崖淵にいる」のなら、場所を示す副詞句、「緊張している」のなら心理状態を示す形容詞句である。形式的には前者が SVA、後者が SVC となる。どちらも、補語であると考えてよい。

【受動態の構文解析】

他動詞は一般に受動態（Passive Voice）をつくる。すでに述べた他動詞文例を再掲すると、以下の通りである。

⑤	SVO－	Ⅲ	Ⅲa	Bees gather honey.
⑥	SVOA	γ (新)	Ⅲb	She compared American English with British.
⑦	SVOO	Ⅳ	Ⅳ	He gave her a book. cf. He gave it to her. →④
⑧	SVOC	Ⅴ	Ⅴ	They elected him President. N.B. 無冠詞
				We heard her groan in the bed.

これらの文を受動態にすると文型が変わる。受動態動詞句を V*で示すと、つぎのようになる。V*は、be 動詞＋過去分詞（＋保留目的語 or「保留副詞」、「保留補語」）をまとめて表す。（なお、この過去分詞を「SVCA の C」とし、V＊をばらして分析的に扱うこともできる。しかし、そうすると 8 文型に収まらない文型が出てくるので煩わしい。）

⑤ → SV*A　Honey＄ is gathered¥ by bees/a.　行為者が副詞句で示される。

⑥ → SV*A　American English＄ was compared with British¥ by her/a.

この場合には、SVOA の A（with British）が受動態動詞句 V* の中に保留され、さらに行為者を示す副詞句 by her がつく。したがって、副詞句が二重に並ぶ。

⑦ → SV*A　She was given a book* by him.（*：保留目的語という）

文意上、間接目的語を主語とする受動態をつくらない動詞がある（例：read, write, sell, buy, sing

など)。また間接目的が保留目的語になるとき、*for*、*to*、*of*、などの前置詞を要求する動詞がある。たとえば、

We found her a nice dress. → A nice dress was found *for* her.

They asked him a serious question. → A serious question was asked *of* him.

⑦ → SV*A　A book was given (*to*) her* by him. (*：保留目的語という)

⑧ → SV*　He was elected President#. (#：「保留補語」といってよい)

SV*A　She was heard *to* groan in the bed. (能動態で to なし不定詞の補語をとる知覚動詞、使役動詞などが、受動態になると保留補語に to 不定詞を要求する。)

【定型的な受動態語法】

なお、感情・意識・決意などを表す一連の動詞が受動態での表現を定型とする。

1）感情、心理状態　例文：He is interested in organic chemistry.

類例 be contented / pleased with～（に満足する)、be amused at～（をおもしろがる)、be astonished / surprised / stunned at～（に驚く)、 be excited at～（に興奮する)、be offended at～（に腹をたてる)、be worried about～（を心配する)、be grieved over ～（を悲しむ)、be bored with～（にうんざりする)、be tired of～（に飽きる)、be tired with～（で疲れる)、be convinced of～（を確信する)、be ashamed of～（を恥じている)、be inclined to do～（したい気がする)、be determined / resolved to do～（することを決意する)。

たとえば、determine は「決意させる；決定する」、resolve は「決意させる；溶解・分解・解決・決議する」となる。「決意」という語義になるときだけ、「決意させる」という語法をとる。一般に、このタイプの受動態は強意表現の 1 種と考えられる。

ただし、make a firm resolve to do …（かたい決意をする）のように名詞になるときには、単に「決意すること」の意味に戻る。

2）従事・関係　例文：He is engaged in medical research.

類例 be devoted to～（に専念している)、be absorbed in～（に没頭している)、 be concerned with（に関わっている)、 be acquainted with（と知り合いである)、be accustomed to（に慣れている）など。

■　伝統的 5 文型論の欠陥

伝統的「5 文型」が文型要素から副詞句を一律に排除したことにより、構文解釈に重大な支障が生じる。「副詞句無視」の原則を例文②、④、⑥に適用してみよう。

すると、② → She is －. (SV：①)、④ → He is afraid － (SVC：③)、⑥ → He compared American English －. (SVO：⑤) となり、明らかに不完全な文になる。ここで－は文型要素がないこと（空白）を表す。したがって、「副詞句無視の文型表は不完全である」というべきなのに、「②を①に、④を③に、⑥を⑤に繰り入れよ」と主張する、これが伝統文法（5 文型論）である。

このロジックは、以下に述べるように、文の理解に深刻な矛盾をもたらす。たとえば、

例②：She is out. の文型を SV（She is.）に還元するのなら、She is in. も SV（She is.）に還元される。副詞を文型要素と認めない以上、out（在宅）か in（在宅）かという「文意を決める語」が文型要素から除かれる。この矛盾は、文型③SVA を認めることで容易に解消する。

つぎに、例④：He is afraid of dogs. で副詞句 of dogs を落としたら、彼の「恐れ」の対象や理由がわからなくなる。I am afraid to say so. や I am afraid that …. も同じく、SVCA に属する†。最後の that 節は名詞節のようにみえるが、じつは I am afraid of it that …. の意味で、本質的には副詞節なのである†。

※注：なお、この文型④を「形容詞文型」というカテゴリーを立てて説明する辞書が多い。‡しかし、これは be 動詞や繋辞（copula）を述語動詞とする通常の文であるから、自動詞文型の一種として説明すべきである。「動詞文型」、「形容詞文型」、「名詞文型」など品詞ごとに「文型」を立てるのでは「文型」の概念が宙に浮く。

例⑥：She compared American English with British. で副詞句 with British（English）を落としたら、compare（比較する）という行為は完結しない。この点では ⑧「不完全他動詞」の構文とよく似ている†。

さらに、He gave her a book.（＝⑦）と、He gave the book to her.（＝⑥）を比べると、前者では強勢が a book に置かれ（ほかならぬ本を！）、後者では強勢が to her に置かれる（ほかならぬ彼女に！）†。英文では、一般に発話の新情報が通常文末に置かれ、強く発音される。伝統的 5 文型論が ⑥ He gave the book to her. を SVO の文型に帰属させることは、強調のため後置された to her を「文型要素」から外すことを意味する（強調構文の語順は別の問題である）。

以上の諸例で検証したように、新 8 文型では、伝統的 5 文型論の欠陥がすべて解消されている。

英語学習者は、5 文型論を脱して 8 文型論に移ることで、構文理解を格段に改善できる。しかし現実には、旧来の 5 文型論を英語学習者に強制する仕組みがある。文科省の指導要領、中高教科書、参考書がすべて 5 文型論に統一されており、理論の良否を評価し、取捨選択する余地がない。

たとえば、つぎのような「文型書き換え」の文法テストを考えよう。†

He gave her a book. ⇔ He gave a book to her.

通例、出題者はこの問題を、「同じ意味の文」の変換として出題する。受験者が「この設問はおかしい。書き換えによって意味が変わる。」（正しい認識）と主張したら、「×」にされてしまうかもしれない。（出題者のほうが誤っているにも関わらず）。

■　構文解析の原理と手順

【分節：句の区切り】

構文解析とは、文をセンス・グループ（意味の切れ目）に切りわけ、各要素の属性（文法的機能）を知ることである。

文型表に掲げた例文のように各要素が単語であれば、区切りは単語の間に入る。ただし、「an apple」のように小さいながら、句というまとまりで扱うべきものもある。英語構文を解析するには、もとの文を文型要素に切り分け、動詞の特性から各要素の属性を判定する。最初に自動詞・他動詞の判別が必要である。しかし、これは一般に容易であろう。意味や和訳からの類推で判定できることが多いからである（しかし例外もあり、語ごとに知っておく必要がある)。

自動詞の文については、先に述べた通り、4 項文型 SVCA が、あらゆる文型を一括して表す。SV、SVA、SVC は一部の項が空白である場合として容易に処理できる。

他動詞の文については、SVOY という共通文型を想定し、単に SVO（Y＝空白）であるか、あるいは Y が A、O、C のいずれであるかを判別する。

この簡単な文例で、構文解析の原理や手順を理解しておけば、文型要素が長い句や節になるとか、従属節を伴うなど、複雑な文でも対処する備えができる。

【記号化分節法：分節区切りに機能別記号を用いる】

文を句に区切る記号をただのスラッシュではなく、句の機能ごとに差異化された記号にしてみよう。これで、このあとの構文解析がきわめて容易になる。

		S	$	V	¥	X	/ Y /.
自④	S$V¥C/A/	He	$	is	¥	afraid	/ of dogs /.
他⑥	S$V¥O/A/	She	$	compared	¥	American English	/ with British /.
⑦	S$V¥O/O/	He	$	gave	¥	her	/ a book /.
⑧	S$V¥O/C/	They	$	elected	¥	him	/ President /.

なお、[$] は Subject のシンボル、[¥] は Verb のシンボルである。各マークが S や V の字画を含むとみて、流用しただけである。通貨単位の意味はまったくない。

動詞のあとにくる文型要素 O、A、C は単に [/] で区切る。後に関係詞用の区切り記号 [&] を導入するので、区切り記号は合計 4 種 [$, ¥, /, &] になる。さらに O、A、C の種別を表したいときにはそれぞれ /o、/a、/c などの添え字で示すことにしよう。たとえば、

⑥	S$V¥O/A/	→	She	$	compared	¥	American English	/o with British	/a.
⑧	S$V¥O/C/	→	They	$	elected	¥	him	/o President	/c.

こうすると区切り記号は、日本語の格助詞のような後置詞の機能を果たす。つまり、

She	$（は、が）	compared	¥（……た）	American English	/o（を）	with British	/a（と）
They	$（は、が）	elected	¥（……た）	him	/o（を）	President	/c（に）

この記号化分節法は、英語の構文解析を格文法の論理で行うことと同等である。すなわち、この機能式分節記号は、語順シンタクス（統語法）に立つ英語構文の文型要素に「後置式の標識」で文法機能を付記する。これは英語構文の文型要素に格助詞テニヲハを付加するようなものである。こう考えると、日本人にとって使いやすい方法であるといえよう。

【英文解釈への応用】

この方法の長所は、機能化された区切り記号を付しただけで（訳すまえに)、原文の構文が明らか

になることである。区切り記号を文型要素の種類に対応させたおかげで、それが構文解析機能をもち、記号を付すことで原文の構造が明示されるからである。

構文解析は読みながら、同時進行（on line）でやるべきものである。このSVXYメソッドによれば、原文を句ごとに区切った段階でただちに、SVCAまたはSVOYへの文型配属が決まる。3項文型（Y＝空）ならこれで構文解析自体も終わる。他動詞・4項構文のときだけ、Y＝A・O・Cの判別を要する。これには時間がかからない（慣れれば瞬時にできる）。だから、だれでもオンラインで構文解析を文字通り実行できる。

この構文解析ができないと、いかに「忠実な直訳」をめざしても、結果は信頼できない。他方、構文理解がたしかであれば、自由に「意訳」しても原意を損なうことはない。

※注：この区切り記号は、漢文の「返り点」に通じるアイデアである。漢文の返り点は一種の「構文解析記号」である。返り点は、語順統語法を採る漢文を格文法言語に読み換える手法でもある。この記号化された構文解析に習熟することを通して、昔の日本人は古典中国語を学ぶことなしに漢文・漢詩を自在に読みこなし、さらには漢文の著作から漢詩の詩作法までマスターした。

英文和訳の場合、ワープロ上で文型要素ごとに区切りを入れ、各要素を日本語で上書きしながら、語順を整序する。以下に示すように、英単語がしだいに和文に置き換わる。

He compared American English with British.	[置換状況]
He ＄compared ￥ American English/o with British/a.	S ＄V￥O/A/
彼は＄比較した ￥ American English/o with British/a.	主＄動￥O/A/
彼は＄American English/o with British/a 比較した ￥.	主＄O/A/動￥
彼は＄米国英語を / 英国英語と / 比較した￥。	主＄目/副 A/動￥

文型が判定できていれば、知らない単語があってもそこに英語語句を残したまま、日本語構文にしていける。こうして先に翻訳を進めてよい。残った英単語はあとでまとめて辞書を引き、訳語を入れる。

また再三出てくる語は、一回目に全置換で日本語に換えて置くと、その語は英文ファイル中で一斉に日本語に換わる。英語構文のままであるが、単語（文型要素）はつぎつぎに日本語に換わっていく。だから、読み進めていく間に、対象の英文ファイルはだんだん日本語を多く含む混合文になっていく。その分だけ単語置き換えの手間が省けるので、構文の変換に力を注ぐことができる。

【英文作成への適用①】

和文英訳の場合もこれと同じく、和文に要素区切りを入れ、逐語的に翻訳しながら、語順を整序する。この場合、予め和文をS＄X/Y/V￥型の文型枠（構文テンプレート）に入れてつくる必要がある。和文を「自由に」綴ってはいけない。S＄V￥を必ず含む［S＄X/Y/V￥］構文で書かなければならないのである。もちろん、日本語の場合、V￥は用言一般を表し、本来の動詞のほか、形容詞・形容動詞の終止形と連用形を含む。

彼らはオバマ氏を大統領に選んだ。	[置換状況]
彼らは＄ オバマ氏を/o 大統領に/c 選んだ ￥。	主＄目/補/動￥

They ＄ オバマ氏を/o　大統領に/c elected¥　　S＄目/補/V¥

They ＄ elected ￥オバマ氏を/o 大統領に/c　　S＄V¥目/補/

They ＄ elected ￥Mr. Obama/o President/c.　　S＄V¥O/C/

この場合も、和文ファイル中の日本語を全置換で英単語に置き換えていくと、至るところに英語の混じった日本語文になる。後ろのほうでは、英単語入力の手間が省け、構文変換に主力を注げる。

【日本語構文への適用②】

なお、注意すべきこととして、和文英訳ではX・Y・Vの関係を日本語の語感で決めることはできない。英語の動詞の属性から逆に文型要素の性格が決まる。ここでまちがえると、不適格文になる危険性が高い。構文区切りの入れ方にも問題が生じる。

彼は＄トム / である¥。　S＄C/V¥　He is Tom.　SVC

彼は＄トムに / 似ている¥。 S＄A/V¥？　He resembles Tom.　SVO

トムに/ という句は和文では副詞句のような語感を伴う。しかし、動詞にresembleを選ぶなら、他動詞の文型になる。いわば is：＝～be equal to、resembles：　～be similar toと考えるのである（＄トム/に似ている)。英語ではtoやintoの感覚が動詞に内部化されて他動詞になることがよくある（例enter：他動詞)。この場合、動詞が名詞を直接支配する。なお、resembleやenterは受動態をつくらない。行為の内容が自動詞的だからであろう。

2掛ける3は6になる

2掛ける / 3は ＄ 6に / なる ￥　　X / 主 ＄ X / 動 ￥

Two times three / になる ￥six /　　S ＄ 動 ￥ X /

Two times three / equals ￥six/.　　S ＄ V ￥ C /

最後の跳躍で彼は世界記録に並んだ。　[置換状況]

彼は＄ 最後の跳躍で / 世界記録に / 並んだ¥。　主＄副/X/動¥

彼は＄ with his last jump/a　the world recordに/並んだ¥。　主＄A/X/動¥

He ＄ に並んだ ￥the world record/with his last jump/a　主＄動¥X/A/

He ＄ equaled ￥the world record/o with his last jump/a.　S＄V¥O/A/

この場合の equal～「に並ぶ、に匹敵する、とタイになる」は他動詞である。「世界記録に/」という句の属性は equal ￥（他動詞）に逆規定されて /o（O：目的）になる。

いわゆる「英借文」でネイティブの構文をまねるときも、「機械的に」単語を置き換えるのでなく、「文型確認・構文解析を介して」まねるのがよい。よく身に着くし、同型の構文一般に通じる知識をえることができる。

【日本語構文への適用③】

※すでに前節に実例で明らかになった通り、構文解析では和文・英文の語順のちがいは副次的な要因であり、項と項の論理的な連接関係（修飾・被修飾、支配・被支配など）が問題である。

使いたい動詞の文型がわからないときは辞書で調べる。文型表示が明快な辞書（たとえば、大修館『ジーニアス英和辞典』、研究社『英和活用大辞典』）を常用するのがよい。なお、基本的な動詞は多

義的で、一般に複数の文型をとる。このような動詞の場合、紙の辞書だと多様な文型を一覧できるが、電子辞書だとスクロール画面に通常一つの文型しか出ない。望ましい訳語がみつかったあとも、その語の最終行までスクロールする人はいないとすると、この点で電子辞書は不利である（軽さや収録容量では断然すぐれているが)。

しばしば「英語で発想せよ」とか「最初から英語で書け」と勧める人がいる。しかしこれを実践してよいのは、達意の英文を書ける人だけであろう。うかつにこの勧めに乗ると、「自分の英語力の範囲」のなかで発想・表現をすることになる。これでは、一般の人には貧しい内容の想念しか思い浮かばないと思われる。

他方、日本語で文章を書く場合、意識的にS・X・Y・Vの構文にしておけば、英語に訳しやすい。限られた英語力で発想するより、はるかに自由度が高いといえよう。ただし、ある程度意識的に「型通りの構文」を用いる、という制約がかかる。

ちなみに、本稿中の文はほぼすべてS・X・Y・Vの構文をもつ（ただし、一般主語のwe, one, theyに相当する語は省いてある)。

【付加語句z】派生文型

ここまではもっぱら基本文型の構文を扱ってきた。しかし、実際の英文は、基本文型の文型要素以外に場合に応じて付加語（adjunct［z]）をとる。

分詞構文、不定詞構文、付帯状況のwithフレーズなどが付加語になる。この付加的語句をzで表すと、文型はSVXYzと表せる。つまり、XYzの3要素に関して構文解析を行うこと（XYzメソッド）になる。ただし、zの位置は文末とはかぎらず、文頭、文中さまざまである。具体例は「派生文型」の節で扱う。例文としてつぎの文をみよう。

This is John speaking.：SVCｚ　これは電話用の決まり文句で、特殊な文型である。

このような付加的語句zを小文字にしたのは基本の文型要素との差異を示すためである。すると、構文はSVXYzとか、zSVXYとかの形になる。この形式で、分詞構文や不定詞構文を扱うことができる。

付加語句zが動名詞・分詞・不定詞（いわゆるverbal）を含む場合、意味上の主語をもつ「補文」となっていることがある。この場合には、これにも構文解析を施す必要がある。

†分詞構文のあつかい～単文ｖｓ複文、どちらに入れるか。

派生文型で扱うものは限定的、XX構文の類は複文とみる。

■　複文

【関係詞：Rと区切り記号：&の設定～R &】

要点は、主節や主文に対して構文解析（文型判別）を行うだけでなく、分詞構文、不定詞構文、従属節などの補文一般に対しても構文解析を行うところにある。じつは、在来の文法書にも、分詞構文や不定詞構文に対して「意味上の主語」を問うべきことが書かれている。これを一層徹底して、これ

らの補文に対してもSVXY方式の構文解析をせよ、というのである。もちろん補文の場合、Sは明示されず隠れている（だから「意味上」という）ことが多い。

文型判別の首尾一貫した適用

実例でみよう。

また、複文になると通常の文型要素に接続詞や関係詞が加わる。それらを一般的にRで表し、区切り記号を「&」とすると、複文の節は「R＆S＄V¥X/Y/」の形になる。疑問代名詞、関係代名詞の文頭移動や、文法的な倒置や省略などで、当該箇所に現れない語句は随時「＊」で示す。

「この翻訳法は＄ある種の日本語文には/適用できない¥。」という文（S＄A/V¥）には、この方法が適用できる。結果はこうなる（S＄V¥A/）。

This method of translation＄ cannot apply ¥ to some types of Japanese sentences/.

ところが、これに似た文章、「この翻訳法が＄適用できない¥日本語構文が＄ある¥。」という文（S＄V¥S＄V¥）には、この方法が適用できない。しかし、このことは区切り記号をみただけでわかる。

日本語文に入った区切り記号をみるだけで、後者が変換不能（複文になる）であり、前者が変換可能であることがわかるであろう。

■　SVXY法の応用－オバマ演説の構文ミス検証

この新文型論が明解な構文解析力をもつことを例で示そう。例として、広く報道されたオバマ大統領の就任演説を取り上げてみる。まず冒頭の25センテンスのうち、22がSVC型、残りがSVO型である。ただし、この文体はかなり偏っている。これは彼が、経済崩壊に瀕した米国の苦況を説明するところから話を説き起こしたことによっている（be動詞を多用、他にremain / has comeなどを使う）。

儀礼的な挨拶ののち、ただちに米経済の現状認識に移る。すなわち、

That we are in the midst of crisis is now well understood. Our nation is at war against a far-reaching network of violence and hatred. Our economy is badly weakened, a consequence of greed and irresponsibility of some, but also our collective failure to make hard choices and prepare the nation for a new age.

[訳文『朝日新聞』2009年1月24日]

私たちが危機のさなかにあるということは、いまやよくわかっている。我が国は暴力と憎悪の大規模なネットワークに対する戦争状態にある。経済はひどく疲弊している。それは一部の者の強欲と無責任の結果だが、私たちが全体として、困難な選択を行って新しい時代に備えることができなかった結果でもある。

主文の動詞はみなbe動詞である。これ以降も、SVCの文型が圧倒的に多い。逆に言うと、この文型ひとつでかなりいろいろなことがいえる。

さてオバマ演説を読んで、筆者は2つの構文ミスを見出した（配布草稿にあるので、おそらく読み飛ばしではないと思われる）。第1は、冒頭に引用したつぎの文である。

"Our economy is badly weakened, a consequence of greed and irresponsibility of some, …." [『オバマ大統領就任演説』朝日出版社、2009、p. 40]

一見すると、これは文法上適格な文：Our economy is badly weakened, which is a consequence of … をもとに、定型的な省略法として「which is」のセットを省いたもののようにみえる。しかし、この好意的（?）な解釈はじつは成り立たない。なぜなら、この which は前の文全体を受けており、省略不可能だからである。この which は「, and this」と同等の実体詞である。訂正は which is の挿入でよい。

訂正法がもうひとつある。孤立している文要素 a consequence に as を補って、Our economy is badly weakened as a consequence of … とするのである。これは正規の SVOA 文である。このほうが引き締まった文といえる（カンマ不要）。

実際の原文は、SVC（受動態）のあとに a consequence of … という属性不明の第4項を従える。しかし、これは必ず A（副詞句）でなければならない。なぜなら、第4項をもつ自動詞文型は SVCA だけであるから。この項を、正規の副詞句 A にするためには as を加えればよい。Cf. 受動態の構文解析法†

さらに、consequence と同格の our collective failure も孤立している。その前の but also（逆接）もおかしい。and also（順接）にするか、先行部分に not only を加えるか、すべきである。すべて修正して、全文を構文的に正すとこうなる。

Our economy is badly weakened *not only as* a consequence of greed and irresponsibility of some but also through our collective failure to make hard choices and prepare the nation for a new age. (not only なし、あとを and also にしても可)

こう直さないと、文法適格な構文としての品格が出てこない（イタリック部分を加筆）。

なお、この例と対照して、「省略可能な which＋be」の構文を復習しておこう。

例：They repaired the windows (which were) broken by the tornado（竜巻）.

このように、具体的な先行詞に直接続く「which＋be」は一般に省略可能である。省略のあと、broken … は the windows への後置修飾句になり、構文上 SVO（＋後置修飾）に簡単化される。この省略は、いわば A＝B＝C を、A＝C に簡単化するものである。

第2の誤りはわりにポピュラーなミスで、「慣用化」する途上にある語法かもしれない。

"To the Muslim world, we seek a new way forward, based on mutual interest and mutual respect." [前掲『オバマ大統領就任演説』、p. 70]

これは SVO のあとに、「, based on …」が続く。結論からいうと、この based on は on the basis of … と訂正すべきである（やはりカンマは不要）。なぜか。

この「相互の利益と相互的尊敬にもとづいて」という意味の句は、副詞的に動詞 seek（ないし文意全体）を規定する。したがって、この文は意味上 SVOA の構造をもつ。ところが、based on …

は形容詞句であり、副詞句（〜にもとづいて）にならない。この部分を副詞句に変えるために on the basis of への書き換えが必要なのである。

元のセンテンスに対する好意的な解釈として、「based on … は a new way forward の後置修飾である」とみた人もあろう。しかし、この解釈もやはり成り立たない。なぜか。

まず、we seek a new way forward からわかるように、a new way はまだ存在せず、これから seek すべきもの（当為）である。つまり、従来から存在していた方法 the way (which is) based on … ではなく、今後つくられるべきものである。

したがって、a new way which should be based on …（当為）であり、単純な省略は許されない。少なくとも a new way to be based on … のような表現が必要なところである。過去分詞（based）は受け身と完了の意味を兼ねそなえているために、そのままでは将来の事象には使えない。

訂正文の on the basis of mutual interest …（副詞句）ならば、seek のさい準拠すべき基準を表すから当為性が正しく盛り込まれている。この点でもこの訂正が適正である。

たしかに based on は、on the basis of より短くて使いやすい。そして同義であるため、品詞の差異が見過ごされ、誤用されることが多い。このミスは日本人の英文によく現れるだけでなく、本例のように native English にも出てくる。しかし正規の法律文書なら、オバマ氏も正しい語法を順守するであろう。彼の演説にはほかにも、余計な and があり、「：」が「；」で代用されるなど、晴れ舞台の公式スピーチにしては小さなミスが散見される。

ちなみに、これらのミスは「意味の通る」誤りであった。実際には、構文ミスと気づいた人のほうが少ないであろう。話し手は、必要な語句を欠落させたかわりに、カンマを挿入して間合いをとった。これで、聞き手は心理的に欠落を補う余裕をえた。こうして基本文型からの「逸脱」が緩和され、相互的コミュニケーションは損なわれなかったと思われる（だからといって「正しい」ことにはならない）。

筆者は、オバマ演説の「内容」を検討するつもりで読みはじめ、「あ、ここは変だ」と感じた箇所を読み直した。プロのスピーチライターが構文ミスをするか、という疑念もあった。「違和感」を感じてから構文ミスや書法ミスであることをつきとめるまでには少し時間がかった。文型の心得があれば「不適格な文」を感覚的にかぎつけることができるが、「不適格である理由」を明らかにするには各文の構文を具体的に検討すること（構文解析）が必要である。

なお、筆者の限られた経験ながら、TIME や THE ECONOMIST、NATURE などではこの種の構文ミスをみたことがない。ウォール・ストリート・ジャーナル WSJ ではときおり見かける。日本の英文紙誌では、むしろミスのない号はないといってよい。学協会誌の英語論文も、甘い査読をパスした構文ミスで溢れている（まれには京大基礎研・刊『Progress of Theoretical Physics』のように、感心するほど精緻な英文査読を行う学術誌もある）。†

■　SVXY 文型の普遍性

ここで述べた SVXY パターンは、チョムスキー風にいうと、native speakers の脳にビルトインされているであろう（それでも逸脱が生じる）。二次的習得者も英語に熟達すれば半ば無意識的この構文パターンを活用できるかもしれない。一般の二次的学習者は、英語の理解や発話においてこの構文パターンを意識的に活用する必要がある。

じつは、この構文構造は、英語にかぎらず近代西欧諸語にほぼ共通である。つまり、文型レベルでは、西欧諸語は構文構造を共有しているといえる。だから、これを身につければ、ラテン系の仏・伊・西・葡であれ、ゲルマン系の独・蘭や北欧語であれ、何語を学ぶのにも役に立つ（ただし、独語のように格変化を強く残す言語では、語順がこの通りになるとはかぎらない―後述）。

逆に、英語学習でこれが身についていなければ、他のヨーロッパ語を学んでもものにならないであろう。まして、一般教育科目の第二（未修）外国語のように限られた時間内の学習であれば、この構文パターンの共通性を積極的・意識的に活用しないとまともな訳読には進めないと思われる。構文パターンの共通性を活かした比較文法（英仏比較文法、英独比較文法など）の授業が学習能率の向上に有効であろう。

ちなみに、ILA（国際言語学協会：International Linguistic Association）の考案したすぐれた国際語「Interlingua」や、よりポピュラーなエスペラントもこの構文システムに拠っている。また偶然の一致ながら、中国語の構文も骨格的にはこの文型と整合的である。だから、本稿の記号的構文解析と漢文の返り点は原理的に共通性をもつのである。

英語論文を書くとき、筆者は、なるべく SXYV 型の構文を用いて日本語の草稿を書き上げ、それを英訳する。以前の節に述べた方法で、もとの和文をワープロ上で対応する SVXY 型の英語構文に翻訳し上書きしていく。この方式で書いた英語論文を米英の学術誌に投稿した結果は、すべて初稿が無修正で掲載された。完璧な文章とはいえなくても、査読者が「訂正を要する」と判定するような誤りを免れていたといえる。

[以下の拙稿参照：(a) Scr. Metall. Mater. Metals, 25 (1991) p. 2291f. (b) Physical Review B 44 (1991) p. 12406ff. (c) Physical Review B 48 (1993) p. 13607f.]

なお、筆者は 1980 年代からこの文型論（の原型）を用いているが、記号化分節法のアイデアを述べるのは本稿が最初である。

さらに、われわれが自分の作成した英文をネイティブの人に査読してもらう場合を考えてみよう。草稿を相手に預けてひと安心とはいえない。なぜなら、彼が不適格な文を確実に指摘・訂正できるとは限らない。むしろ、文法能力や熱意が十分でなければ、彼らは容易に「あやしい英文」を見逃す。また、元の英文のレベルが低いと、相手はそのレベルに「配慮」してチェック基準を甘くするであろう。労をいとわず丁寧に朱筆を入れる熱意と能力を、相手に要求できるとはかぎらない。筆者は、学会誌論文の査読で「native check を受けた」と称する英文を大幅に訂正した経験がある（全項目を、訂正理由を付して書き直した）。

内容については、査読者よりも著者本人のほうがよく理解しているはずである。だから、「自分のいいたいことがきちんと表現できたか否か」をまず自分でチェックする必要がある。これを査読者に委ねることはできない。

省みると、われわれにしても、外国人の書いた邦文を完璧に訂正し、訂正理由を納得のいくように説明できるとはかぎらない。しかし、西欧語の SVXY 文型が日本語では SXYV の構文になることを説明すれば、欧米人も容易にこの型の日本語構文を会得できるはずである。

つまり、語順が異なっても構文的対応をつけることはできる。たとえば、ドイツ語では、主節は SVXY、従属節では SXYV（日本語と同じく動詞後置)、副詞句（節）が文頭に来ると、A、VSXY となる。文型間の「対応」どころか、「同一」の文が、他の句・節との関係で異なる語順をとる。

この文型対応を理解していれば、日本語学習者も「どういう文をつくればよいか」というイメージを、自分の母語での文型と関連づけて、構成できるであろう。もちろん語彙や用言の活用を学ぶ労を免れることはできないが、目標の文構造が明解であればそれだけ学習も容易になり、また「まちがいを含む場合でも、文意が通じる」可能性が高まる。

■　詳細な動詞型を設けることの問題性－「OALD 動詞型」批判

さて、英語の研究者や教員は、「役に立たない文型論」を棚上げして、オックスフォード流の「動詞型・Verb Patterns」を使っているかもしれない。たしかに、これで文型論の不備を補うことができる。ところが、これによると「動詞型」は 20 種もある。「OALD の動詞型・20 項を列挙せよ」といわれて、即答できる英語教師がいるだろうか。これでは、「文法事項として記憶・活用する」には煩雑にすぎる。覚えられないほど詳しいとすると、学習者は折角の知見を活用できないであろう。このジレンマを越えるには、どうすればよいか。その解決策が、この XY メソッド・8 文型論である。簡単に覚えることができ、しかも必要十分な詳しさ（精度）をもつ。OALD：Oxford Advanced Learner's Dictionary

なお、オックスフォード流の動詞型論がかくも煩雑になるのはなぜか。それは、V・X・Y の連接関係を扱うさいに、目的・補語といった文法カテゴリーを用いず、名詞句、形容詞句、前置詞句、to 不定詞　that 節、wh- 関係詞節などと細分した句・節概念を用いるからである†。これは、文法規則というより、個々の動詞の語彙特性（語用論）に関わる知見であるといえよう。

だから、文型論に戻って目的・補語といった総称的カテゴリーを用いれば、Oxford 版・動詞型の類似項目を一括することができ、動詞型の数を大きく減らすことができる。冒頭に掲げた文型一覧はこの経緯を踏まえたものである†。

ちなみに、現代の英文法学では、構造文法にせよ生成文法にせよ、「副詞句の一律無視」といった不備は除かれている‡。この意味では、5 文型論は歴史の遺物である。

英和辞典類はつとに 5 文型を脱却しており‡、「SVA・SVOA の文型を収録して「7 文型論」に移行している。それでもなお SVCA の文型を欠いている。ただしこの構文は、無視・黙殺されている

わけではなく、「形容詞文型」という別の項目に収録されている。しかし、形容詞文型は、当然ながら自動詞文型の一種であり、そのなかに組み込む必要がある。動詞文型・形容詞文型・名詞文型とさまざまな「文型」を立てる「慣習」は望ましくない。これでは、英語構文の統合性・簡明性がかえってみえなくなる。

日本の英語教育界はこういう進歩に目を閉ざし、ひたすら伝統文法を墨守してきた。他方では、外部から「英語教育の不備」がさまざまに指弾され、改善が論議されている。ところが、こと文法学習については強化策どころか圧縮論さえ横行しているように思われる。「英文法重視」に反対する人は、英文法の習得と会話や英作文の能力が背反すると思い込んでいるように思われる。あるいは、自分は「文法を勉強したのに会話ができない、文法重視主義の被害者だ」と思っているかもしれない。もっとも、受験用の英文法に偏りがあり、その学習が文法力の向上に役立っていないかもしれないという危惧は検討に値する。

しかし、文法力と会話・作文能力は補完的・相乗的であり、トレードオフではない。大事なことは「両者の連携性を高める」ことであり、「どちらをとるか」の問題ではない。

このように、文法能力の普遍的な重要性が認められれば、英語で英文法を教えることが非現実的・非能率的であることは論を俟たない。たとえば、本稿は高校生でも十分に読めるであろうが、もしこれが英語で書かれていたら英文科の上級生でも読み通すのは困難であり、むしろ「英語の文法論」というだけで敬遠されるのが普通であろう。英文法は、日本語で能率よく学べるからこそ英語力向上の早道になるのである（以下次号)。

本稿に先立つ論考に以下のものがある。構文論としては一貫しているが、「記号化分節法」の形でまとめたのは本稿が最初である。

⑴ 「8 文型システムによる基本文型と派生文型の統合的分析」、『中京大学　文化科学研究』第 16 巻 (2006) 第 2 号(中京大学学術研究会).

⑵ 「英文の読解・作成のための構文解析－英語脳を鍛える方法」、『中京大学　文化科学研究』第 17 巻 (2007) 第 2 号 (中京大学学術研究会).